

2015年4月25日、ネパールにてマグニチュード7.9の地震が発生しました。建築物の倒壊などで多数の死傷者が出ているとの情報により、日赤本社はERU（緊急援助隊）が派遣される可能性が高いと判断されたため、まず先遣隊を送って医療ニーズの確認、活動地の選定、医療救護を行うことになりました。

その後、本社から当院の中出国際医療救援部長に、当院職員の派遣の打診が25日の午後にありました。中出部長は病院業務の都合などですぐに出発ができなかったのですが、ちょうどその時は、病院内で「国際救援体験ツアー」が行われていて、私を含め院内には、ほとんどの救援部関係者が揃っていました。そこで中出部長より、「明日から2週間ネパールに行ける？」と聞かれました。大型連休を目前に控え、一緒にゆっくり過ごすはずであった家族や、仕事を肩代わりしてもらった職場の同僚や入院中の患者さんの顔が浮かびました。しかし、派遣期間は2週間と、派遣の中では比較的短期間であったのと、派遣されれば良い経験になるし、前向きな返事をしたからと言って自分が選ばれるとは限らないと考え、「2週間なら可能」と返事をしました。その日は病院で当直でしたが、20時頃に当院から私と矢野看護師の派遣が決定したとの連絡があり、それから院内で持参する装備を救援部の池田国際救援課長師長に揃えて貰いました。平行して仕事の申し送りなどをしつつ、当直業務として緊急手術もおこないました。

その後、自宅に帰って荷物を詰めて、関西空港から午前11時の便でクアラルンプールを経由しネパールに向かいました。クアラルンプールで東京出発のメンバー2名と合流して、その日の夜にカトマンズ行きの飛行機に乗り換える予定が、飛行機の出発は翌朝4時に変更となっていました。事情がわからないまま空港内のホテルで仮眠し、午前3時にゲートに向かいましたが、結局、飛行機が離陸したのは午前8時を過ぎてからで、現地政府の混乱などもあり、最終的にカトマンズに到着したのは、28日の午後でした。

先遣隊は、ERUの派遣前に少人数で現地に入り、現地赤十字社や政府から被災状況の情報を確認したうえで、クリニックの設置場所を決めるなど活動の準備をします。同時に、医薬品を持参して、小規模ながら医療救護も速やかに開始します。

診療拠点は、首都から比較的近い被害の大きかったメラムチ村に置くこととなりました。先にネパール入りしていた本社要員の視察により、その地域にある唯一の診療所が被災しているということで、ここを活動の拠点とする方針となったのです。

首都カトマンズでは大きな被害は目につきませんでした。29日に今回活動拠点となったメラムチ村に向かって行くと、徐々に道路のひび割れや建物の損壊が目につくようになりました。地方では煉瓦を積んだだけの家が多く、そのほとんどが倒壊していました。

メラムチ村の診療所では、地震の後、通常の数倍以上の患者が殺到し、数にして1日に200人以上が受診しました。その中の50～60人が外傷で、何らかの処置が必要な状態でした。余震が続くため患者さんたちは建物の中に入るのを怖がり、診療所の前に机を持ち出し、外で診察を行っていました。現地医師は2名しかおらず、応急処置もままならない状態で、たまたま実習に来ていた現地の看護学生たちが傷の手当てをしている状態でした。我々は、日本の赤十字社から災害救援のために来たので手助けしたい旨を説明し同意を得て、すぐに診療所内で救護活動を開始しました。言葉の問題もあり、診察や投薬は現地医師に、傷の処置（感染創のデブリドメントや傷の縫合、ギブス固定などの外傷の処置）は日赤で行うように仕事を分担しました。そしてERU本隊の到着後は、診療所での処置だけでなく、周囲の村落への巡回診療や被災者の心のケアも行われるようになりました。

私は約2週間ネパールに滞在し、この本隊の活動開始を見届けて帰国しましたが、今回のように途上国で大規模な災害が起こった場合は、その国だけでは対応できず、国際的な援助が不可欠であることを目の当たりにしました。日本で日常の業務に追われていると、災害現場の状況にはなかなか思い及びませんが、このように意義ある活動に参加する機会を得たことで、改めてその必要性を強く実感することができました。これも周囲のご理解と応援があつてのこと、改めて感謝したいと思います。ありがとうございました。この気持ちを忘れることのないよう日々努めてまいりたいと思います。



被災地で診療中